母の旅立ち

～最愛の母へ息子からの感謝のメッセージ～

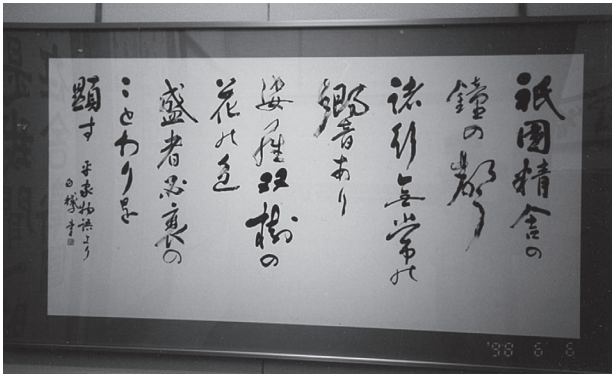
石川 文夫

青山ライフ出版

母へ　文夫より

お母さん、今どうしていますか？
私はあなたのやさしい眼差しが見れなくて淋しいです。
私はおかげ様で毎日元気に過ごしていますよ。
もうすぐお母さんが好きだった桜が満開に咲く春が来ます。
お母さんもきっと遠い空から桜を眺めるのでしょうね。
本当に長い間お世話になりました。ありがとう。

令和2年2月　文夫



母の書道作品　平家物語から（平成10年6月 母70歳）

はじめに

令和元年8月12日18時43分、母朝子は91歳9カ月の生涯を終えた。年初から入院し有料の老人施設や大学病院を複数回往復し、懸命に回復治療にあたったが残念ながら永遠の旅に出た。母と私は62年10カ月の付き合いだった。

昭和2年生まれの母は昭和、平成の時代を生き抜いた。新たな年号、令和元年にその人生を閉じた。母が入院する前までの長い間、私は母と同居していたが、年初からの約8カ月の私と母の関係は、これまでの62年余りで最も身近で濃密な関係だったと思う。

真冬から春、初夏、梅雨、そして猛暑の夏、毎日、毎日、母の顔を見て話しをするために病院や施設へ出かけた。出張、大学講義、講演などに影響が出ないようにしながらも、母の容態の連絡がいつ来てもいいように、携帯を常に脇に置いて、いつでも母のところに駆けつける覚悟で日々生活をした。

病院や施設からの電話に出る時は、覚悟して出た。眠れない夜も多々あった。

令和元年もはや夏が過ぎ9月に入った。母が久し振りに小さな骨壺に入って自宅に戻り私のそばにいる。私は今母が暮らしていたスペースで生活をしている、母の仏壇に向かって朝起き

れば「おはよう」、夜眠る時には「おやすみ」、出かける時には「行ってくるよ」、そして帰れば「ただいま」と話しかける。母がその大きい優しい瞳を向けて「行っておいで」、「お帰り」と返事をしてくれるように感じる。

母は私が出かける時、必ず玄関まで出てきて私のことを見送ってくれた。寒い冬は「マスクは？」「マフラーは？」雲行きが悪い時には「傘持った？」台風が近づいて荒れる日もあった。そんな時は「大丈夫？」、いくつになっても母は私の身体のことを心配してくれた。「食べ過ぎ、飲み過ぎ、太りすぎはダメだよ」母から見ると私はいつまでたっても子供だったと思う。そんな母に私は甘えていた。

突然の母との別れはこの上なく辛く、悲しい。母のことは生涯忘れることはない。いや一瞬でも忘れようと思わない。母と縁がありこの世に生まれ落ちてからこの年になるまで母はいつも心の中にいた。そして60年余り育てられてきた。

昭和に生まれ戦争の時代を生き抜き、昭和、平成を生きた母の生涯を息子として活字に残しておきたい、それが私の思いである。

母も私も著名人ではないが、母とその息子が歩んだ道を読んでいただければとても嬉しい。そしてこの世に91年生きた一人の女性、石川朝子のことを少しでも知ってもらえればこのうえなく嬉しい。

目次

はじめに …… 3
心の空虚感 …… 8
このやるせない寂しさ …… 10
母、小泉朝子の原点、その歴史と家族 …… 12
母と私の出会い …… 26
母と私の生活の原点　～洗足池での生活～ …… 31
夏の大磯の思い出 …… 41
大岡山への引っ越し …… 46
海峡の町　未知なる土地　下関への移動 …… 48
山口県下関から東京へ …… 56
父　弘（ヒロム）のこと …… 66
母との京都の旅 …… 69
母の最初で最後の海外の旅 …… 72
母と書道 …… 77

我が家のピー助……82
運命の1月の冬の日……85
胃瘻のこと……92
胃瘻を作る決断……94
新たな施設へ移動……97
再発！……101
また施設へ戻る……102
8月2日という日……108
生涯忘れられない　8月12日……113
49日の法要と母との永久（とわ）の別れ……115
そして、今、母への手紙……118
結びに代えて……120
著者紹介……123
母　朝子の主な人生の年譜……124
母の賞罰、資格取得　主なもの……127
追悼　「母の息吹」……130

■　心の空虚感

9月になっても、まだまだ残暑厳しい日が続いている。アブラゼミの鳴き声は少なくなりツクツクボウシの鳴き声が耳に響く。いつもと同じような残暑の光景なのに、今年は違う。庭に出て植木をいじる母の姿がない、新聞受けをのぞきに行く母の姿がない、落ち葉を箒で掃除する母の姿がない、部屋のソファに座り、老眼鏡をかけて新聞の活字を読んでいる母の姿がない。心がむなしく、さみしさで折れそうになる。母は今どこにいるのであろうか？「どこにいるの？」とささやいても何ら返事がない。ガランとした部屋。

全財産をはたいても、借金をしても、世界中を飛び回って探し歩いても、もうあの温かいおでこを持った母には会えない。いつも病室のベッドに寝ている、母の頭を抱きしめて、「文ちゃんはここにいるよ。ずっといるからね」といいながら、夏は私の汗がにじんだシャツで母の頭を覆いながら話しかけた時に手に感じた母の体温、ぬくもりはもう2度と感じることが出来ないのだ。しかし、この現実を受け入れることが今の私には出来ない。今、この文章を書いている姿を2メートルもない距離にいる仏壇の前の小さな骨壺に入った母がじっと見つめているかもしれない。しかし、無言である。それが現実である。

横浜生まれの横浜育ち、母は横浜生まれにプライドを持っていたと思う。好きな食べ物は「崎

陽軒のしゅうまい」「うなぎ」、神戸屋の「ソーセージパン」。鰻重をソファに座り少しずつ美味しそうに食べる母の顔や、やや曲がった腰で食材を暖めるためにオーブンを開けて中に入れる姿、台所でブロッコリー、人参などの野菜を煮込む姿を思い出す。つい最近まであたり前のようにそんな母の姿を見ることができた。今は、時間を刻む時計の音だけがむなしく部屋に響く。母から見れば、幼い時は決して丈夫ではなく学校の受験の時などで心配を色々かけてきた、私のことで幾度も悩んだこともあったと思う。無事に就職して社会人として39年間同じ企業に勤務し、この年まで健康で生きてこられたのは母のおかげである。

第二次世界大戦をくぐり抜け、91年の人生を生き抜いてきた母へ心から感謝をこめて、私が知る範囲内でこれから母の軌跡を書き残していく。そして将来私があちらの世界で母と再会したらこの本を母に見せて読ませてあげたい。

きっと、いつものように嬉しい気持ちを照れ隠ししながら、母はソファに座ってこう言うだろう。

「へぇ〜文ちゃん、あんた忙しいのによく書いたわねぇ。よくやるよ」と。

■　このやるせない寂しさ

私が母の病室を覗くと、ベッドに寝ている母が大きな瞳で私を見つめる。「どうした？」というのが私の母への挨拶、そして目薬を両目につけてあげる。母の目から目薬の液がこぼれて頬を伝わる。すぐにティッシュペーパーで母の両目を拭くと母は目をぱちくりする。目やにがついて片目がくっついているような時もあったがだんだん目は綺麗になっていった。そして、おでこを市販のスキンケアシートで拭いてあげる。時にはそのスキンケアシートをおでこに乗せたままにする。冷たくて気持ちがいいかなと思いそのままにすると大抵母は「いいよ～」と言って嫌がった。特に「石川さん、今日はお熱があるのですよ」と看護師さんに言われた時は冷やすと気持ちがいいかなと思いおでこに乗せたが母は大抵嫌がった。

時々、母は喉が渇いたと言う。私は「じゃあシュッシュッする？」と聞く。母は嬉しそうな顔で頷いて口をあける。「リンゴ？　レモン？　水？」と聞いたあと、「リンゴにしようね」と言って準備をすると母は口を開ける。開けた口にシュッシュッとスプレーでリンゴの味がついた口内を殺菌してくれるジュースのような水分を入れる、母の口の中は白い痰の塊も見えたりするけれども、唇の周りをしめらせるためにスプレーをかけたあと口の中にスプレーをしてあげる。母は嬉しそうにそのジュースを飲む。そして「もっと、もっと！」と幼い子供のようにせがん

だ。あまりたくさんいっぺんに飲ませるわけには行かないので「少し休憩しよう」と言うと母は仕方がないという顔で諦めてくれた。「あまりいっぺんに飲むとよくないからね」と私は母をなだめたが、母に思い切りりんごジュースやミネラルウォーターを飲ませてあげたかった。

毎回母の所に行くと母が寝ている時以外はこの光景は同じで、私の中で大きなストレスになった。飲ませてあげたいけれども、誤嚥肺炎を起こす原因になることを考えるとたくさんは飲ませることは出来ない。私の心の中はいつもこの葛藤の連続だった。でも、今は言える。

「お母さん入院中はごめんなさい、今、どこにいるかわからないけれど、たくさん好きなポカリスエットやカルピスソーダを飲んでいてくれたら文ちゃんはとても嬉しいよ」

両手で抱きしめると温かい体温が伝わってきた母のおでこはいまどこにもない。あの母の姿はもう見られない。母がいない現実を考えると、心が重たいなまりの塊で押しつぶされるようだ。母がいないこの現実。この寂しさや空虚感は私の生命が息絶えるまで、その生命を閉じる時まで永遠に消え去ることはないのだ。

人間の生命のはかなさを感じる。ふと、私もこのままこの世から消えてこの寂しさから逃れたくなる。そうすれば心が楽になりこの寂しさから逃れることが出来るから。この世から消えれば、母のところに確実に行けるのだろうか？　あの優しい母に会えるのだろうか？

そうだ！　これから時空を越えてあの頃の母に会いに行こう！